武井　孝介（たけい　こうすけ）



教授
専門分野／公益事業論、企業論、公共経営論

学位：博士（経営学）学習院大学
学歴：学習院大学大学院 経営学研究科 博士後期課程　修了
略歴：作新学院大学経営学部・同大学院経営学研究科准教授、教授を経て、2019 年より現職。
著書：『郵政事業の新展開―地域社会における郵便局の役割―』（郵研社、2003 年、共著）
論文：「DX 社会における郵便局・ゆうちょの事業戦略と今後の課題」『季刊個人金融』第 17 巻第 4 号、2023 年。
「イギリスにおける郵便事業の現状と新たな取り組み―現地調査からの考察―」『JP 総研 research』70 号、2025 年。
「デンマークにおける郵便制度改革と今後の課題―政府系郵便事業体のビジネスモデル転換とその社会的影響―」『JP 総研 research』72 号、2026 年。ほか

交通系「〇〇印」集めのススメ―現地でしか得られない「モノ・コト」の価値―

みなさんは「御朱印」というものをご存じでしょうか。御朱印とは実際に神社やお寺へ足を運んで参拝した人に対し、その証として社務所や寺務所で授与される印章・印影や墨書き（社寺名、ご祭神やご本尊の名前、参拝日などが記載される）のことです。寺社仏閣めぐりといえば、以前は圧倒的に中高年世代の人たちが多かったのですが、最近では「スピ活」（スピリチュアル活動）の場として寺社が若い世代の人気を集めており、休日ともなると御朱印を求める多くの若者たちでにぎわう神社やお寺も珍しくないようです。

ところで筆者の専門分野である交通事業でも、近年、この御朱印をモチーフにした様々な企画が行われています。その先駆けとなったのが、2020 年より全国 40（2026 年以降は 41）の第三セクター鉄道（＝自治体などの公共部門と地元の民間企業などが共同出資する鉄道会社のこと）でスタートした「鉄印」の取り組みです。

この鉄印をもらうには、まず専用の集印帳である「鉄印帳」（2,500 円）を購入した上で、各社が指定する駅の窓口で乗車券の提示（その鉄道を実際に利用したことの証）と所定の記帳料（300～500 円が多い）を納めると、その鉄道会社オリジナルの鉄印が授与されます。第三セクター鉄道の多くは少人数のスタッフで運営されているため、「書き置き印」（予め紙に印字・印刷されたもので、日付のみスタッフにスタンプや手書きで入れてもらう）を購入して自分で鉄印帳に貼るスタイルが一般的ですが、中には駅のスタッフ自らがお客様の鉄印帳に記帳してくれたり、あるいは社長の直筆による鉄印を用意してくれている会社もあります。

また、鉄印自体も年間を通して販売される通常版のほか、季節限定や期間限定のデザイン、キャラクターや他業種とコラボしたデザイン、さらには和紙など地域の伝統工芸品を使用したプレミア感のある鉄印などもあり、窓口ではどれを購入しようか迷ってしまうこともしばしばです。このように各鉄道会社は、それぞれにアイデアと趣向を凝らしながらさまざまな種類の鉄印を提供することで、一度だけでなく何度でもお客様に自社の鉄道路線へ足を運んでもらえるよう地道な経営努力を行っています。

その結果、北は北海道から南は鹿児島まで、すべての第三セクター鉄道の鉄印をコンプリートした後、2 巡目、3 巡目と新たな鉄印を求めて全国のローカル線を再訪する人々も見られるようになりました。また、最近では従来の第三セクター鉄道だけでなく、地元の私鉄なども参加してそれぞれの地域ごとにローカル線の旅を楽しめる「エリア版鉄印帳」（東北・道南、東海、中国・四国、近畿）の販売も開始されるなど、「鉄印の旅」は今や鉄道ファンだけでなく一般の観光客や旅行者の間にも広く浸透してきているところです。

この「鉄印」の好調ぶりを受けて、他の交通機関でも同様の企画が進められています。2021 年には高速船やフェリー、遊覧船、クルーズ船、さらには海洋関係の博物館の利用者を対象に、港の窓口や船内の売店などで御朱印の船バージョン「御船印」の販売が開始されており、現在では全国約 180 もの船会社や博物館が参加するビッグプロジェクトに成長しました。さらに 2026 年 7 月からは、日本各地のロープウェイやリフト（これらは「索道＝さくどう」と呼ばれます。ちなみにケーブルカーは「鋼索鉄道」という鉄道の一種です）を対象とする「索道印」も新たに始まっています。

老若男女を問わず、こうした交通系「〇〇印」はなぜ人々を惹きつけるのでしょうか。もちろん全国各地のバラエティに富んだ魅力あふれる〇〇印を、とにかくたくさん集めたいというコレクション欲求はあるでしょう。ただ、それ以上に現地へ直接足を運んで実際に乗車しないと入手できないという「経験価値」を、現代社会に暮らす多くの人々が求めているように感じます。いうまでもなく、現地へ行くにはそれなりのお金と時間がかかるのと同時に、そこまでのアクセス方法や交通機関の時刻を調べておく必要があるなど、事前に相応の準備と手間が必要です。そうした一連の「苦労」や「面倒」なプロセスを乗り越えてようやく手に入れられたという達成感や満足感が、〇〇印を集める最大の動機といえるのではないでしょうか。

また、〇〇印を集めるという目標をきっかけに、これまで見聞きしたこともない土地を訪れれば、そこでしか見られない風景を眺めることができたり、古き良き時代の面影が残る街並みをぶらぶら散策してみたり、地元でしか食べられないご当地グルメに舌鼓を打ったりといった「非日常のワクワク感」を得られる点も魅力です。さらに、〇〇印をもらうついでに現地で関連グッズやお土産を購入したり食事などをすれば、微力ながらも人口減少と過疎化で経営が苦しい地方の交通事業者や、ひいては地域経済そのものを応援することにもつながります。そして集印帳をめくってこれまでに集めた〇〇印を眺めれば、「直筆で記帳してくれた親切なスタッフさん」のことや「駅前にある唯一の食堂が臨時休業のため夕食をとることができず、空腹を抱えたまま夜行バスで帰路についた」ことなど、旅先での出来事や思い出が何年経っても鮮明によみがえってきます。つまり〇〇印は、旅の「記憶」と「記録」の両方を残すことができる絶好のアイテムなのです。

みなさんもたくさんの魅力を持った全国の交通系「〇〇印」を集める、ちょっとアナログな旅に出かけてみませんか。

閲覧者向けメッセージ

AI の急速な普及・発展に伴い、あらゆる情報を自宅や学校、職場に居ながらにして瞬時かつ容易に入手できる時代になりました。ただ、実際に現地へ赴いて自分の「目と手と頭」で経験・体感しないとわからない情報、また現地の人たちと会って直接コミュニケーションを取らないと得られない情報は山ほどあります。

「百聞は一見に如かず」という有名なことわざがありますが、本格的なデジタル社会を迎えてタイパ・コスパが重視される今の時代こそ、必要かつ重要な考え方だと思います。まずはインターネット等で入念に下調べを行った後、実際に現地・現場を訪れて状況を把握する。それをもとに自分でしっかり考えて行動する。こうした一連のプロセスを大事にしながら、「理論」と「実証」の両面をバランスよく教育プログラムに取り入れている東京成徳大学経営学部でともに学びましょう！